

三月一四日(火)

色鮮やかなメニューを一ページずつめくり、最後のドルチェ、デザートまでしつかり目視してクルツとひっくり返す。振り出しに戻って最初から眺めるものの、何を頼めばいいのかよく分からない。

向かいの席に座るルミさんがメニューから視線を上げ、「どう、決まった？」

と訊いてくる。私は曖昧に微笑んで、「すみません。まだ、迷ってて」と答えた。

「じゃあ、適当に頼んでもいい？」

私が頷くと、彼女は呼び出しボタンを押した。

「何か一品、どうしてもコレだけはつてのを選んでおいて」

メニューをじっくり見て選ぶ間もなく、ルミさんが読んだウエイトレスがやってくる。ルミさんはメニューを指差しながら、サラダやらチーズやらを頼んでいく。「それと、」と私の方を見た。

「ああ、じゃあ、コレを」

メニューを広げ、品物を指し示す。

「あと、ドリンクはフルーツワインのラ・フランスで。瑞希さんは？」

「お酒はアレなんですけど、オールフリーを」

ウエイトレスは注文を繰り返し、メニューを抱えて厨房へ歩いて行った。

「ピザ好きなんだ。意外」

「そうですか？」

「勝手に、和食とか魚好きだと思ってました」

ウエイトレスが先にドリンクを運んでくる。ルミさんと乾杯すると、彼女はグイッとワインを飲んだ。私はビール風飲料で喉を潤す。

「ルミさんはワインがお好きなんですか？」

「うん、嫌いじゃないけど、好きってほどでもないかな。コレは物珍しかったから、ついつい。瑞希さんはそれで良かったの？」

ルミさんはウエイトレスが運んできた葉野菜たっぷりのサラダを、手際よく取り皿に分けてくれる。彼女に手振りで「食べて」と促され、「いただきます」と手を合わせてお箸を手を取った。一口頬張ると、食べ慣れない味が口中に拡がっ

ていく。

「一応、未成年なんで」

「えっ、ウソ。気を遣わせてゴメンねえ」

「いいいえ。ビールっぽい味は好きなんで」

ノンアルコールビールは家でも散々、晃兄に飲まされている。誕生日を過ぎたら、哲朗さんや一兄にも色々連れ回されるんだろう。

「いくつだっけ？」

「一九です」

「一九？ セコ下……。セコ下、か」

ルミさんは次々に運ばれてくる料理に目もくれず、茫然と何も無いところを見つめている。私はチーズやらソーセージの盛り合わせやらを適当に取り分け、自分の分を端っこから摘んでみる。

「仕事もできて、モデルもやれて、彼氏もいて。羨ましいなあ」

「か、彼氏なんていませんよ」

「本当に？ この間のおめかしは、誰がどう見てもデートでしょ」

ルミさんは底意地の悪そうな目つきでじつとり見つめてくる。通りがかつたウェイトレスを呼び止め、二杯目のフルーツワインを注文した。空きのグラスをそのままウェイトレスに手渡し、自分の目の前にある取り皿にフォークを突き立てる。サラダを口に運んで、ヤギみたいに口を動かして草を咀嚼した。

「アレは、ただのお出かけです」

「二人つきりでお出かけしたら、十分デートでしょうよ」

程よくアルコールが入ったルミさんは、新しく届いたワインをまたまたグイッと飲んだ。徐々にエンジンがかかり始めているこの人相手に、デートかどうか論争を持ちかけても勝ち目はなさそうだ。

哲朗さんとは彼氏彼女の関係かどうかの話に切り替えよう。それで納得してもらえるかは分からないけど、酔っ払いをなだめる、あしらうことを最優先に考えよう。上手くいくかは神のみぞ知る――。